登場人物

ヘレーネ・アルヴィング夫人　侍従の肩書を持つアルヴィング大尉の未亡人
オスヴァル・アルヴィング　彼女の息子、画家
マンデルス牧師
大工エングストラン
レギーネ・エングストラン　アルヴィング夫人の屋敷で仕える

物語は、ノルウェー西部の大きなフィヨルドに面したアルヴィング夫人の屋敷で進行する

第一幕

（1）

レギーネ　なんの用？　びしょびしょじゃない！
エングストラン　おまえ、これは天からの恵みの雨だよ。
レギーネ　くそったれた雨だ。
エングストラン　おいおいレギーネなんて口を――。実はな、おまえに話があって――
レギーネ　ドンドンさせんじゃないよ！　お坊っちゃまがおやすみなんだ。
エングストラン　真っ昼間から？　おれなんか五時半から仕事だよこんちくしょう。
レギーネ　ああ、分かった分かった、さっさと行けよ。こんなとこであんたとランデブーなんかしたくないんだよ。
エングストラン　何したくないって？
レギーネ　あんたと話してるの見られたくないの。さあ、行って。
エングストラン　いや、今日の昼すぎにゃ孤児院の仕事がおしめえんなる。あしたは落成式だ。そうすりゃあ町のお歴々がいっぱいおいでんなる。牧師のマンデルスさまもだ。
レギーネ　牧師さまは今日だよ。
エングストラン　そうれみろ。牧師さまにとやかく言われることだけは絶対にしたくないからな――。
レギーネ　ふん、そういうこと。牧師さまを騙して何する気？
エングストラン　おいおい、牧師さまを騙す？　とんでもない。マンデルスさまはよくしてくださる。いやそれでな、話というのは、その、おれは今夜の船で帰るんでな――レギーネ、おまえも連れてきたい。
レギーネ　なんだって？
エングストラン　おまえをいっしょに家に連れてきたい。

レギーネ　わたしを？アルヴィング奥さまのお屋敷からあんなボロ家に？　ばか言うんじゃないよ！
エングストラン　なんだいそりゃあ！　てて親に歯向かう気かこのあまあ。
レギーネ　おまえとはかかわりはないってしょっちゅうどなりつけてたくせに――いやらしいこと言っては――！
エングストラン　そりゃまあちょいと一杯引っかけたときだけだ――あいつが言うことを聞かないときだよ。あいつはすましこんで、「離して離してエングストラン！ほっといて！私はローゼンヴォルの男爵さまのお屋敷で、三年間ご奉公したのよ！」（笑う）自分が奉公してるときに大尉どのが男爵になったんで、それが大自慢。
レギーネ　かわいそうにおっかさん――あんたがいびり殺したんじゃないか。
エングストラン　あああああみんなあたしが悪いのよ。
レギーネ　その足。ピエ・ドゥ・ムトン。
エングストラン　英語か？　勉強までさせてもらってるそれは好都合だ――。
レギーネ　わたしを町でどうしようっていうの？
エングストラン　親ひとり子ひとり、おれは寂しい男やもめじゃないか。
レギーネ　そんな見えすいたたわごとやめなよ。どうして連れてきたいの？
エングストラン　よし、話してやる。おれはな、今ひとつ新しい仕事を始めようと思ってる。
レギーネ　ああまた？　何度目？
エングストラン　ああ、しかし今度という今度は、見てろよレギーネ――けつの穴ほじくって――いやいや悪かった。実はな、ここの孤児院の仕事でちっとばかり小銭がたまったんでは。それで、この金をなんか儲かるものにつぎ込もうって寸法なんだよ、その。船乗り相手のバーかなんか――
レギーネ　いやらしい。
エングストラン　いやいや、とんでもねえ――船長とか航海士とか、その、ちゃんとした船乗りだおまえ。

レギーネ　それでわたしは――？
エングストラン　うん、ほんの顔見せ、何もするこたあない。好きなことしてればいいのよ。
レギーネ　なるほど。
エングストラン　そりゃあおまえ、女だってちっとはいなくちゃあたりまえだ。晩になれば歌ったり踊ったり、楽しくな。何せ世界の荒海を股にかける船乗りだ分かるだろ。自分をむだにするんじゃないよレギーネ。こんなところでどうなるええ？　勉強がなんになる？　孤児院の子守番――そんなものがおまえに似合う仕事か。汚いガキどものために――。
レギーネ　あんたの知ったことじゃないだろ――。ためた金どのくらい？
エングストラン　まあ、七、八百クローネってとこかな。
レギーネ　悪くないね。
エングストラン　手初めには十分だ。今な小湊通りにこぎれいな家を一軒手に入れようと思ってる、そこを船乗りの家に、いいだろ。
レギーネ　いっしょに行く気はないね。あんたとはかかわりたくない。さあ、もう行ってよ！
エングストラン　大丈夫。そう長くいっしょにいることにはならないよ。おまえの振る舞い次第。ほんとに、このところめっぽうきれいになりやがって――
レギーネ　それで――？
エングストラン　すぐに船長さんがほっとかないよ――
レギーネ　わたしは船乗りなんかといっしょになる気はないね。
エングストラン　いっしょになんてならなくたっていい。楽しみはみんなおんなじだ。あのイギリス人――三百ドルだよ。おっかさん、おまえよりきれいってことはなかったほんとだ。
レギーネ　出てけ！
エングストラン　おいおい乱暴するなよ。
レギーネ　ぶつよ！　おっかさんをそんな風に言って、ひっぱたいてやる！　出てけ！　音立てるんじゃないよお坊っちゃまが――
エングストラン　おやすみだ、分かってる。いやにお坊っちゃまのことを――おお、まさかおまえお坊っちゃまと――

レギーネ　とっとと行けよ！　あ、牧師さまだ。台所から――
エングストラン　分かった分かった――親の恩てえのは海よりも深い――牧師さまが教えてくださる。だっておれはおまえの父親だからな、教会の洗礼帳にちゃあんと書いてある。

（2）

マンデルス　こんにちはエングストランさん。
レギーネ　まあようこそ牧師さま！　フェリーもう着いたんですの？
マンデルス　たった今。鬱陶しい雨がつづいてるね。
レギーネ　お百姓さんには恵みの雨です牧師さま。
マンデルス　そうだ。町のものはついそういうことに気がつかない。
レギーネ　まあびしょぬれ。（コートを脱がせて）玄関にかけておきましょう。お傘も――広げておきます。すぐに乾きますから。
マンデルス　うん、ここはやっぱりいい。変わりはないかね？
レギーネ　はい。
マンデルス　しかし、あしたの準備で大忙しだろう？
レギーネ　それは何かと。
マンデルス　奥さまはご在宅？
レギーネ　お二階のお坊ちゃまのところに――お呼びしましょうか？
マンデルス　そうそう――下で聞いた。オスヴァルが戻ってるって？
レギーネ　はい、おととい。今日だとばかり思ってましたのに。
マンデルス　それで、元気かね？
レギーネ　はい。でもお疲れの様子で。パリから乗り継ぎ乗り継ぎだったそうですから。少しおやすみだと思います。ですから、もうちっと小さな声で。
マンデルス　そう、しっ――
レギーネ　どうぞ、お座りになって牧師さま、お楽になさって――。
マンデルス　ありがとう。いやエングストランさん、あんたこの間会ったときからみるとずいぶん大きくなった。
レギーネ　あらいやだ。奥さまもわたしが太ったっておっしゃいます。
マンデルス　太った？　いやまあ、うん――ところで、あんたのお父

さんは元気にやってるかね？
レギーネ　はいおかげさまで、とても元気にやっております。
マンデルス　このあいだ町に来たとき、わたしのところに寄ってくれてた。
レギーネ　そうですか。父は牧師さまのお話をうかがうのが大好きのようで。
マンデルス　もちろんしょっちゅう会ってるんだろう？
レギーネ　ええ、それは――
マンデルス　お父さんはな、決して性格の悪い人じゃない。だれかちゃんとした人がついててあげないと。身内のものがそばにいて世話してあげる必要がある。自分でもそれを認めてた。
レギーネ　ええ、わたしにもそんなふうなことを言ってました。でもアルヴィング奥さまが許してくださるかしら。――新しい孤児院の世話もありますし。それにわたし、奥さまのおそばを離れたくはありません、とってもお優しくしてくださる。
マンデルス　しかし、娘としての義務があるだろう――もちろん奥さまの同意は必要だが。
レギーネ　でも、どうですかしら。わたしの歳で、独身の男の世話をするというのは。
マンデルス　独身！　何を言ってる。実の父親だよ！
レギーネ　ええそう、でもやっぱり――。これが立派なちゃんとした男の方でしたら――
マンデルス牧師　しかしレギーネ――
レギーネ　わたしがお慕いして、尊敬して、尽くすことのできるお方なら――
マンデルス　しかしね君――
レギーネ　それでしたら喜んでまいります。ここはそれはそれは寂しいところですから――牧師さまもひとりぼっちがどんなものかご存じでしょう。わたし自分で言うのもなんですけど、やる気はありますし、できもします――。お優しい牧師さま――どうかわたしのことお気にかけてくださいまし――
マンデルス　も、もちろん、エングストランさん。
レギーネ　だって、わたし――

マンデルス牧師　すまないが、奥さまをお呼びしてくれないか。
レギーネ　ただいま牧師さま。

（3）

アルヴィング夫人　いらっしゃい牧師さん。
マンデルス　こんにちは奥さん。約束どおり――
アルヴィング夫人　相変わらずの時間厳守。
マンデルス　ありがたい委員会とか会議とか、抜け出すのは簡単じゃなかった。
アルヴィング夫人　おかげで食事前に仕事をすませられる。お荷物は？
マンデルス　下のホテルに預けてきました。今晩はあそこに泊まるので。
アルヴィング夫人　あら、今度もここにはお泊まりいただけないの？
マンデルス　いやいや奥さん。ご親切に。でもいつものとおり下で泊まります。その方が都合がいいから。
アルヴィング夫人　まあお好きなように。でもわたしたち、もうこんな歳なんだし、何も――
マンデルス　冗談はやめてください。いや、あなたが浮き浮きしてるのは分かります。明日はお祝いの日、それにオスヴァルが帰ってる。
アルヴィング夫人　そうなの。とっても幸せ！　あの子二年ぶりでしょ。それに、この冬はずっとここにいるって約束してくれた。
マンデルス　そう、それは感心だ。ローマやパリには、ここにはない魅力があるでしょうからね。
アルヴィング夫人　でもここには母親がいます。あの子は母親思いなの。
マンデルス　まあ、芸術なんぞというものにたずさわっていても、人間、そういう自然の感情がなくなってはいけない。
アルヴィング夫人　ほんとに。あなたあの子が分かるかしら。楽しみね。すぐに降りてきます。――あら、どうぞおかけになって牧師さん。

マンデルス　どうも。それでは、と。
アルヴィング夫人　登記所？
マンデルス　全部そろっています。完璧。これを間に合わせるのはそう簡単じゃなかった。役人てやつは、まったくばかばかしいくらい細かいことに口を出す。しかし、とにかくみんなそろいました。これがローゼンヴォル地区内にある敷地の登記書。新しい建物、学校と寄宿舎とチャペルもある。それから、これは学校の寄贈と規則に関する承認書。アルヴィング大尉記念孤児院の規則。
アルヴィング夫人　これで出来上がり。
マンデルス　称号は男爵より大尉の方が仰々しくないでしょ。
アルヴィング夫人　ええええ。
マンデルス牧師　それからこれが銀行の通帳。利息で孤児院の経費はまかなえる。
アルヴィング夫人　ご親切に。でもこれはあなたが持っててください。その方がいいでしょう。
マンデルス　喜んで。さしあたっては銀行預金がいいと思う。利息は高くないが、半年四パーセント。そのうちいい投機筋を見つけて――もちろん、第一抵当権の確実なもの――そのときはまたご相談します。
アルヴィング夫人　ええ。あなたはそういうことはなんでもよく知ってる。
マンデルス　気をつけておきます――ところで、前から一つお聞きしておきたかったことがあるんですが――。
アルヴィング夫人　なんですか。
マンデルス　孤児院の建物に、保険はかけますか。
アルヴィング夫人　もちろんかけなくちゃ。
マンデルス　ちょっと待って奥さん。ちょっと考えてから。
アルヴィング夫人　わたしは何でも保険をかけてる。建物も家財も、収穫物や貯蔵物にも。
マンデルス　そう。ご自分のものには。わたしだってそう。しかしいいですか、これは別でしょう。孤児院は、つまり崇高な目的のためにある。
アルヴィング夫人　ええ、でも――

マンデルス　わたし個人にとしてはもちろん異存はない。しかしほかの連中はどうとりますかね？　あなたの方がよくご存じだ。
アルヴィング夫人　他の連中――？
マンデルス　――こういうことになると決まって文句を言い出す連中、町では、そういう連中がしばしば口をだす。あなたやわたしが神の導きなんぞ全然信じてはいないと言い出します。
アルヴィング夫人　でも牧師さんそんなこと――
マンデルス　もちろんもちろん――わたしの心はしっかりしてる。しかしね、だからといって、他人の誤解や中傷まで止めることはできない。それは孤児院の運営に影響を及ぼして、わたしは苦しい立場に追い込まれる。孤児院は大きな話題になってるんです。この仕事の管理をしているわたしは、嫉妬深い連中からいちばんに避難をあびる。
アルヴィング夫人　そんな――
マンデルス　新聞雑誌が書きたてるのは言うまでもない――
アルヴィング夫人　分かりました、それじゃやめましょう。
マンデルス　じゃ保険はかけない、それでいいんですね。
アルヴィング夫人　ええ。
マンデルス　しかしもし火事が起こったらどうします？　そうしたら建て直すことができますか？
アルヴィング夫人　いいえ、はっきり言っておきます、そのつもりはありません。
マンデルス　いやこれは奥さん――重大な責任ですよ。
アルヴィング夫人　でもほかに道はある？
マンデルス　いや、そこなんだ。ほかに道はない。われわれは人から疑いの目で見られるわけにはいかない。
アルヴィング夫人　あなたはね、牧師だから。
マンデルス　われわれはかたく信じる――こういう建物は特別な神のご加護のもとにあるんだと。
アルヴィング夫人　そう願っときましょう。
マンデルス　じゃ保険なしですね。
アルヴィング夫人　ええ。
マンデルス　結構。ご希望どおり――保険はかけず、と。

アルヴィング夫人　でも不思議ね、今日この話を持ち出したのは――
だってきのう、あやうくあそこで火事が起こるところだった。
マンデルス　なんだって！
アルヴィング夫人　まあ、なんでもなくすんだんだけど。仕事場でカンナ屑に火がついた。
マンデルス　エングストランの仕事場？
アルヴィング夫人　ええ。あの人、よく無造作にマッチをすてるとか。
マンデルス　あの男は頭の中にいろんなことがつまってる――いろんな誘惑が。でも感心なことに一所懸命努力はしている。
アルヴィング夫人　そう？　だれが言ったの？
マンデルス　自分で言ってました。腕のいい大工なんだが。
アルヴィング夫人　ええ飲んでさえいなければ――
マンデルス　そう、悲しいことにそれが弱み。だからだれかそばにいて世話してやるものが必要なんです、自分でもそう言ってる。そこがあのヤーコブ・エングストランの可愛いところで。自分ではどうしようもなくて、わたしのところのにやって来ては己を責め弱みを正直にさらけ出す。この間話をしたときは――。ねえ奥さん、もしあの男の魂にとって、レギーネを連れ戻すことがどうしても必要だとしたら――
アルヴィング夫人　レギーネを！
マンデルス　あなたも反対しないでしょうね。
アルヴィング夫人　いいえ、絶対に反対です。レギーネには孤児院の仕事がある。
マンデルス　しかし、あの男は父親なんだし――
アルヴィング夫人　あの男がどんな父親か、わたしよく知ってます。あの娘をあの男のところへやるなんて決して承知しない。
マンデルス　まあまあ奥さんそうきつくとらないで。あなたエングストランさんをひどく誤解してる。そんなに驚いて――
アルヴィング夫人　わたしはレギーネを引き取った。あの娘はここにいます。しっ、マンデルスさん、もうこの話はやめ。ほら！　オスヴァルが降りてくる。考えるのはもうあの子のことだけ。

（4）

オスヴァル　ああ失礼――応接間だと思ったものだから。こんにちは牧師さん。
マンデルス　いやあ！　これはこれは――
アルヴィング夫人　どうマンデルスさん？
マンデルス　なんて言うかなんて言うか――、いやあほんとにこれが――
オスヴァル　ほんとにこれが、放蕩息子。
マンデルス　しかしまあ――
アルヴィング夫人　オスヴァルが画家になりたいと言ったとき、あなた反対した。それで言ってるのよ。
マンデルス　いや、人間の目には危険に見える一歩があとになるとしばしば――ようこそようこそ！　まったくねオスヴァル――オスヴァルと呼んでいいだろうね。
オスヴァル　ほかになんて呼びます？
マンデルス　うん。ではオスヴァル、わたしは、その、画家というものを全否定しているわけではない。画家の中にも人間として清らかな魂の持ち主はたくさんいると思う。
アルヴィング夫人　ええ、そういう画家がここにひとりいる。どうこの子はマンデルスさん？
オスヴァル　お母さん、やめてよ。
マンデルス　もちろん。君はもうかなり有力だ。新聞にもよく載って、非常に好意的に書いてある。まあ――このところちょっと見かけないが。
オスヴァル　ええ。――お母さんお昼まだ？
アルヴィング夫人　もう少し。ありがたいことにこの子食欲旺盛なの。
マンデルス　それから煙草も。
オスヴァル　部屋でお父さんのパイプを見つけた。
マンデルス　なるほど、それでか。
アルヴィング夫人　何が？
マンデルス　いやね、オスヴァルがパイプをくわえて入ってきたとき、まるでアルヴィングがまた現れたような気がした。

オスヴァル　ほんとに？
アルヴィング夫人　ばかなこと！　オスヴァルはわたしに似てるのよ。
マンデルス　いや、その口もと、唇、アルヴィングそっくりだ――パイプを吸ってると特にね。
アルヴィング夫人　いいえ。この子はどちらかというと牧師ふうでしょ。
マンデルス　まあ、わたしの仲間には似たような口をしたのがいないことはないが。
アルヴィング夫人　パイプはやめなさいオスヴァル。この部屋ではだめ。
オスヴァル　うん、ちょっと試してみただけだ。子どものとき一回これを吸ったことがあるものだから。
アルヴィング夫人　おまえが？
オスヴァル　うん、小さかったとき。よく覚えてる。あの晩お父さんはぼくを部屋に入れてくれた。お父さんとても陽気で。
アルヴィング夫人　そんな昔のこと覚えてるはずない。
オスヴァル　いやはっきり覚えてる。お父さんぼくを膝にのせてこのパイプをくわえさせた。吸ってみろ坊主――ぐっと吸い込んでみろ。それでぼくはできるだけ深く吸った。そしたら気持ちが悪くなってどっと汗が出てきた。それでお父さん愉快そうに大声で笑った――
マンデルス　不思議なこと。
アルヴィング夫人　いいえ、それはオスヴァルが見た夢よ。
オスヴァル　違うよお母さん、夢じゃない。覚えてない？　――あのときお母さん飛んできてぼくを子ども部屋へかかえってたじゃない。それからぼく病気になって、お母さん泣いてた。――お父さんてよくあんな悪ふざけをしたの？
マンデルス　若いころのお父さんはね、そりゃあ生きることを楽しんでた――
オスヴァル　それでも世の中のために立派なことをたくさんやった。
マンデルス　そう、実際、君は立派な父親の名前を継いでるオスヴァル・アルヴィング。お父さんを手本にして――
オスヴァル　ええ。
マンデルス　しかし君も感心だ。お父さんの記念日にちゃんと帰って

きた。
オスヴァル　せめてもの恩返し。
アルヴィング夫人　それにしばらくここにいてくれる――その方がもっと感心。
マンデルス　そうそう、冬はここで過ごすって？
オスヴァル　いつまでと決めたわけじゃ――家は、何と言ってもいいものだから！
アルヴィング夫人　そうでしょう？
マンデルス　君は早くから家を出たしねオスヴァル。
オスヴァル　ええ。ときには早すぎたんじゃないかと思うこともあった。
アルヴィング夫人　ちっとも。男の子にはいいことよ。ひとり息子には。親にちやほやされていては駄目になってしまう。
マンデルス　それはどうですかね、難しい問題だ。子どもにはなんと言っても親といっしょの家庭がいちばん。
オスヴァル　その点はぼくも賛成。
マンデルス　息子さんどうですか。いやなにも隠すことはない。二十六、七にもなって、まだ一度もちゃんとした家庭を味わったことがない。
オスヴァル　失礼ですが牧師さん――それは違ってる。
マンデルス　そう？　君の仲間はほとんどが画家だろう。
オスヴァル　そう。
マンデルス　みんな若い。
オスヴァル　ええ。
マンデルス　結婚もしてないんじゃないか。
オスヴァル　そう、そんな余裕はありません。でも家をもつことはできる。ちゃんとした気持ちのいい家を。
マンデルス　いや、わたしが言っているのは、家庭だよ。夫と妻と子どものいる。
オスヴァル　それとも、男と女とその子ども。
マンデルス　これはまた――
オスヴァル　なんですか？
マンデルス　一緒に住む――子どもの母親と！

オスヴァル　女と子どもを捨てろというんですか。
マンデルス　それは法律で許された関係じゃない！　いわゆる同棲ってやつだ！
オスヴァル　いっしょに住むのに許すもなにもないでしょう。そんな話は恋する若ものには通じません。
アルヴィング夫人　ええ通じない。
マンデルス　ねえ、息子さんのことを心配したのももっともだったでしょう。そういう不道徳があたりまえになっている連中と付き合って——
オスヴァル　牧師さん、申しますがね、ぼくはそういう家で、淫らなことを耳にしたことも目にしたことも一度だってない。そういうことに出会うのはどだかしってますか。
マンデルス　知るわけがない！
オスヴァル　じゃ教えましょう。それはね、この国の手本になるはずの男たちがパリにやってくると、もう勝手な振る舞いをする——そしてぼくらの集まる小さい飲み屋なんかにきて、そういう話を聞かせてくれる。ぼくらが夢にも知らない場所のことを。なかには、その道の通もいる。ああ、あの素晴らしい自由な生活があんなふうに汚される——。
アルヴィング夫人　興奮しないでオスヴァル。体によくないよ。
オスヴァル　うん、疲れのせいだ。ちょっと散歩してくる。失礼しました牧師さん。

（5）

アルヴィング夫人　かわいそうに、あの子——
マンデルス　そう、かわいそうにあんなふうになって。自分を放蕩息子と言ってた。情けない情けない！　あなたはいったいなんと思っているんです。
アルヴィング夫人　わたしわたしはオスヴァルの言うことがすべて正しいと思ってる。わたしも同じように考えてた。でも口に出せなかった。いま息子がわたしのために口を開いてくれる。

マンデルス　かわいそうな人だ。ねえ奥さん、今わたしはあなたにひとつまじめな話をします。事業の忠告者でもない協力者でもない。ご主人の古い友人としてでもない。あなたの人生でいちばん大事なこのときに、目の前にいるのはひとりの牧師だと思ってください。

アルヴィング夫人　ええ、その牧師さまが何を話してくださるの。

マンデルス　あしたはご主人の十年目の命日、記念の建物が落成される。明日わたしは集まった聴衆をまえに演説をする――しかし今日は、あなたひとりだけを前にして話をします。

アルヴィング夫人　結構。話してください。

マンデルス　覚えてるでしょう、あなたは結婚して一年たつかたたずに、人生ギリギリのところまできてしまった。あなたは家も家庭もすてた――ご主人から逃げた。――そう奥さん、逃げた逃げたんです。そして戻るのを拒んだご主人が手をついて頼んでも。覚えてるでしょう。

アルヴィング夫人　あの最初の一年、わたしがどんなにみじめな思いをしていたかあなた忘れたの。

マンデルス　それそれ、そういう幸せの要求、それが反抗心のあらわれ。いったいどんな権利があってわれわれは幸福を要求できるのか。いいえ、われわれのなすべきことは義務をはたすことそれだけ。あなたの義務とはいったん選び神聖な絆で結ばれた夫にしたがうことそれだけ。

アルヴィング夫人　あの頃のアルヴィングの生活がどんなものだったか、放蕩ざんまいの生活、あなたもよく知ってるじゃない。

マンデルス　そんな噂があったことは知っている。それが本当なら、いくら若いからといって彼の行状を認めはしない。ですがね奥さん。妻は夫に審判をくだす立場にはないんです。あなたの義務は、神が下されたその十字架をつつましく耐えることだった。ところがそうする代わりに、あなたはその十字架を投げすててしまった。罪びとを支える代わりに置き去りにして、立派な名前と名誉を台なしにしようとした。それだけじゃない――あやうくほかの人々の名誉まで傷つけるところだった。

アルヴィング夫人　ほかの人々？　ほかのひとりの人ってこと。

マンデルス　あなたわたしのところに逃げてきた。浅はかなとんでも

ない行為だった。
アルヴィング夫人　牧師のところへ逃げることが？　親しい友人のところへ――？
マンデルス　それだからです。――わたしが意志堅固な男だったことを神に感謝なさい――わたしがあなたのヒステリックな行為をやめさせたこと、あなた自らの務めに引き戻し、法で決められた夫のもとに帰らせる力がわたしにあったことを神に感謝しなさい。
アルヴィング夫人　たしかにあれはあなたのおかげ。
マンデルス　わたしは神の貧しい手先だったにすぎない。それでその後のあなたの生活はどうだったか、大いなる祝福だったでしょう？　すべてわたしの言ったとおり。アルヴィングは放蕩をぷっつりやめ、立派な夫になった。あれ以来死ぬまで、あなたたちは非の打ち所のない結婚生活を送った。そうでしょう？　町のために尽くし、あなたも彼の事業の協力者になった。非常に有能な協力者に――いや分かってます奥さん、その点はほめてあげる。――だがここであなたが人生で犯した第二の罪のことを話さなければならない。
アルヴィング夫人　どういうこと？
マンデルス　あなたはその昔妻の義務を拒んだ。今度は母親の義務を拒んだんです。
アルヴィング夫人　ああ！
マンデルス　あなたはいつだって恐ろしく頑固だった。何もかも自分勝手でたらめ。邪魔になるものはなんでもよく考えもせずに簡単に放り投げてきた。妻であることが面白くなくなるとご主人から逃げた。母であることが面倒になると子どもを他人にまかせてしまった。
アルヴィング夫人　ええ。
マンデルス　しかしそのために、あなたご自身が息子さんの他人になってしまった。
アルヴィング夫人　そんなばかなこと！
マンデルス　そうですよ、そうに違いない。息子さんは戻ってきた。で、どうなってる。いいですか奥さん。ご主人に対して罪を犯したことをあなたが認めているのはこの記念事業で分かります。今は息子さんに対する罪も認めるべきです。息子さんを正しい道に引き戻

M5.ラップ・マンデルス

すのにまだ遅すぎはしない。まわれ右、救えるものは救う。だってはっきり言いますがね奥さん、あなたは罪のある母親なんだから！——これを言うのは、わたしの義務だと思ったんです。

アルヴィング夫人　あなたよく話してくださった。明日はみんなの前で夫を記念して演説をされる。わたしは明日は話さない。でも今は、あなた同様、あなたに向かって少し話をしようと思う。

マンデルス　なるほど言い訳をしたい——

アルヴィング夫人　いいえ。ただ話しておきたいだけ。

マンデルス　そう——？

アルヴィング夫人　あなたが今おっしゃったこと、わたしや夫やわたしたちの結婚生活について、わたしがあなたのいう義務の道に引き戻してからどうなったか、それはみんなあなたご自身の目でたしかめたことではないわね。それまで毎日のように家に来てたのに——あれ以来ぱったり足を運ばなくなった。

マンデルス　あなたがたはあのあと町から越して行った。

アルヴィング夫人　ええ、あなたは夫が生きている間は一度もここへ見えなかった。孤児院のことがあって、それでやむをえず訪ねて来るようになった。

マンデルス　ヘレーネ——わたしを非難してるのか。かんがえてもごらん——

アルヴィング夫人　あなたが牧師だってことを？　そう。わたしは逃げ出した妻。こんな無鉄砲な女にはいくら注意してもしすぎることはない。

マンデルス　君——それは言い過ぎだ——

アルヴィング夫人　ええええ、それはもういいの。わたしが言いたいのは、あなたがわたしの結婚生活についてあれこれ言うとき、それは世間一般の噂を簡単に信じてるにすぎないってこと。

マンデルス　なるほどそれで？

アルヴィング夫人　でもねマンデルス、本当のことを教えてあげる。あなたにはいつか真実を知らせようと心にきめていたあなたにだけは。

マンデルス　真実？　どんな？

アルヴィング夫人　わたしの夫は生きてる間じゅう、そして死んだと

きも、体が腐ってた。
マンデルス　なんだって？
アルヴィング夫人　十九年の結婚生活の間、夫は、あなたがわたしたちを結びつける前と同じ、腐ってた。
マンデルス　あの若いときの遊び――まあ、身持ちが悪かったといってもいい――それを腐ってたというんですか――！
アルヴィング夫人　それはお医者さまの使われた言葉。文字通り体が腐ってた。
マンデルス　まさか、そんなこと――まったくどういうこと、そんな病気を。なんだかくらくらする。あなたの結婚生活に――そんな地獄が！
アルヴィング夫人　そう。これでお分かりでしょう。
マンデルス　いや分からない、合点がいかない！　いったいどうして、どうして隠しておけたんですそんなことを！
アルヴィング夫人　毎日毎日終わりのない戦い。オスヴァルが生まれたときアルヴィングの身持ちも少しはよくなったようにみえた。でも長続きしなかった。わたしには二重の戦い。息子の父親がどんな人間か人に知られてはならない。知ってるでしょう、アルヴィングは人好きのする人だったからだれからもよく思われた。どんな生活をしても評判を落とすことはないって男だった。それでマンデルス――これも知ってもらう――もっとひどい、何よりもいちばんひどいことが起きた。
マンデルス　もっとひどいこと！
アルヴィング夫人　わたしは、あの人が家の外で隠れて何をしても黙って我慢していた。でも、とうとう家の中でまで淫らなことをするようになったとき――
マンデルス　この家の中で！
アルヴィング夫人　ええ、この家で。あそこ、あの食堂にいたとき最初にそれを見つけた。ドアは半開き。女中が花に水をやるために庭から入ってくるのが聞こえた。少ししてアルヴィングが入ってきた。あの人、女中と何か小声で話してた。それからわたし聞いたの。――ああ、あの声がまだ耳に残ってる。いらいらさせる、そのくせとても滑稽――わたし自分の女中がこう言うのを聞いた、「やめてく

ださい男爵さま！　やめてちょうだい！」
マンデルス　なんですかそのいたずらは！　いや奥さん、ほんとにちょっとしたいたずらだったんですよ。
アルヴィング夫人　わたしには分かった。男爵どのは女中をものにした――そして当然の結果が生じた。そうなの牧師さん。
マンデルス　そんなことがこの家の中で！
アルヴィング夫人　この家ではいろんなことを我慢してきた。毎晩あの人を家に引き留めておくために――部屋で酒盛りにも付き合った。さし向かいで乾杯して、淫らなわけの分からない話を聞いてやった。それからあの人をベッドに押し込むのがひと苦労――
マンデルス　そんなことまで――
アルヴィング夫人　息子のためわたしは我慢した。でもあの侮辱――自分の女中が――そのときわたしは誓ったの、これが最後！　そして家の実権を握った――夫もほかのことも。今は夫の首根っこをおさえたから夫は何ひとつ文句は言えなかった。それでオスヴァルを外へやったの。あの子は七つになるところで、子どもなりにことの善し悪しが分かりかけていた。なにかと聞きたがる年ごろだった。マンデルス、それだけはわたし我慢できなかった。あの子がこの堕落した家の中で息をしてる。それだけで体が毒されるに違いない。それで外国にやったの。父親が生きているかぎりこの家に戻さなかった。これで分かったでしょう。わたしにはどんなにつらかったかだれも知るものはいない。
マンデルス　本当に大変な苦しみだったんですね。
アルヴィング夫人　仕事がなかったらとても耐えられなかった。でも仕事があった。畑の拡充、改良。アルヴィングの功績だと思われていたいろんな工夫――一日中ソファに寝そべって古雑誌を読んでるしか能のなかったあの人！　とんでもない。すべてわたしだった、あの人が放蕩しているか泣き言をならべているしか能のないときに、家の一切を切り盛りしていたのは。
マンデルス　それなのに彼のために記念碑を建てた。
アルヴィング夫人　これはたくらみなの。
マンデルス　たくらみ――？　どういうこと？
アルヴィング夫人　真実はいつか世間に知られる。それを恐れてた。

それで、孤児院を建ててておけば悪いうわさは消えて変な疑いをかけられることもないだろうというわけ。
マンデルス　なるほど。
アルヴィング夫人　それからもう一つ理由がある。息子のオスヴァルには父親から何ひとつ遺産を受け継いでもらいたくない。
マンデルス　それじゃああれはアルヴィングの遺産で――？
アルヴィング夫人　ええ。毎年、孤児院のために積み立てておいた金額は、ちょうどあのときアルヴィングからもらった結納額に相当する。
マンデルス　ああ――
アルヴィング夫人　あれが売買の代金――。あの金は一銭もオスヴァルに渡したくない。わたしの息子は全てをわたしから受け継ぐ。

（6）

アルヴィング夫人　もう戻ったの大事な大事な坊や！
オスヴァル　ええ、こんなに降ってばかり、外で何ができる？　（レギーネ来る）やっとお昼らしいな、ありがたい。
レギーネ　奥さまに小包みが。
アルヴィング夫人　あしたの記念の歌よ。
マンデルス　ふん――
レギーネ　それから、お昼の用意ができました。
アルヴィング夫人　ありがとう、すぐに行く。
レギーネ　お坊っちゃま、ワインは白ですか、それとも赤？
オスヴァル　どっちもエングストランさん。
レギーネ　ビアン――（去る）
オスヴァル　栓抜くの手伝ってやろう――（去る）
アルヴィング夫人　言ったとおり、落成記念の歌。
マンデルス　あした、わたしはどんな演説をすればいい、図々しく！
アルヴィング夫人　まあ、なんとかやれますあなたなら。
マンデルス　そう、何も恥を世間にさらすことはない。
アルヴィング夫人　ええ。これで長かった醜い喜劇もお終い。あさっ

M6.Jaylikethealphabet - Freeze - Instrumental

Fo

てから、死んだあの人はこの家に一度も生きていなかったことになる。ここはもう、わたしの息子と母親のほかはだれもいないことになる。

レギーネ　（内から声）オスヴァルったら！　やめてよ！　やめてちょうだい！

アルヴィング夫人　ああ――！

マンデルス　なんだあれは！　ええ奥さん？

アルヴィング夫人　ゆうれい！　あのときのふたり――また現れた。

マンデルス　ええ！　じゃレギーネ――？　あの娘がその――？

アルヴィング夫人　何も言わないで――いきましょう。

M7.Nanase - Dear

第二幕

（1）

アルヴィング夫人　おそまつさまでした。オスヴェル、おまえもこっち来ない？

オスヴァル　ちょっと散歩してくる。

アルヴィング夫人　そう、雨もちょうど止んだようだし。レギーネ、下で花輪作ってるの手伝ってきてちょうだい。

レギーネ　かしこまりました奥さま。

M8.Kohsakah

（2）

マンデルス　向こうには聞こえない？

アルヴィング夫人　ドアを閉めておけば丈夫。オスヴァルは散歩だし。

マンデルス　まだくらくらしてる。食事も喉をとおらなかった。

アルヴィング夫人　わたしも。でもどうしたらいい？

マンデルス　どうしたらいい。さっぱり分からない。こういうことには経験がないんで。

アルヴィング夫人　まだ大ごとにまではいってないと思うけど。

マンデルス　そんなとんでもないことを！　しかし、これはよくないたしかによくない。

アルヴィング夫人　ほんの気まぐれ、そうに決まってる。

マンデルス　いや、わたしはこういうことはよく分からない。でもね、一つだけはっきり言えることは――

アルヴィング夫人　あの娘はここにおいとけないってこと。すぐに暇を出して――

マンデルス　そう、言うまでもない。

アルヴィング夫人　でもどこへやる？　きちんとした家は――

マンデルス　どこってもちろん父親のところ――。
アルヴィング夫人　だれのところ？
マンデルス　あの娘の――。いやエングストランは違うんだ――。しかし奥さん、いったいどうしてそんなことが？　あなたの思い違いですよ。
アルヴィング夫人　残念だけど思い違いじゃない。ヨハンネはわたしに打ち明けた。だって仕方ないでしょう――アルヴィングも認めざるをえなかった。それでヨハンネには暇を出した――。
マンデルス　ああ、そう。
アルヴィング夫人　あとでごたごたを起こさないようにそれ相当の金をやって。あとのことは自分で決めたんでしょう。昔なじみのエングストランとよりを戻した。いくら持ってるかほのめかしたのね。どこかの外国人が夏にヨットでやって来てとかなんとか。だから急いで式を挙げた。あなたでしょうあのふたりを結婚させたのは。
マンデルス　しかし、どうも納得がいかない――わたしはよく覚えてる。エングストランはすっかりしょげ返って、許婚と犯した過ちを心から後悔していた。
アルヴィング夫人　あの男自分で罪を着なくちゃならなかった。
マンデルス　しかしうそをつくにもほどがあるこのわたしに対して！　いや、ヤーコブ・エングストランがそんな男だとは正直夢にも思わなかった。ようし、ぎゅうの目にあわせてやる見てるがいい。――そんな不潔な結婚を金のために――！　娘にやった金ってどれくらいだったんです？
アルヴィング夫人　三十万。
マンデルス　いやいや――三十万のはした金で堕落女と結婚する！
アルヴィング夫人　それじゃ堕落男と結婚したわたしはどう？
マンデルス　堕落男？
アルヴィング夫人　あなた、アルヴィングが式を挙げたときエングストランが結婚したヨハンネより清い体だったと思ってるの。
マンデルス　しかしそれは天と地の差がある――
アルヴィング夫人　そうかしら。たしかに買値にはたいへんな違いがあった――三十万のはした金と全財産。

マンデルス　そんなこと比較にならない。そんなことをいっしょくたにして。あなたはもちろんご自分でもよく考え、家族の同意も得ていた。
アルヴィング夫人　あの頃わたしの心がどこを向いていたかあなたご存じだと思ってた。
マンデルス　それが分かってたら、あなたたちのところに毎日現れることはしなかった。
アルヴィング夫人　ええ、でもとにかくわたしは自分から同意したんじゃなかった。それだけはたしか。
マンデルス　それはまあ、身内の方々のすすめにしたがった。それが義務です、母上とふたりの伯母上がすすめた以上――。
アルヴィング夫人　あの三人が詳しく計算してくれた。こんな申し込みを断るばかはいないって、見事に証明してくれた。その結婚のなれのはてがこうだと知ったら母はなんて言うかしら。
マンデルス　しかしこれだけははっきり言える。あなたの結婚は完全に法と秩序にのっとっていた。
アルヴィング夫人　そう、法と秩序。わたしよく思うの、それこそがこの世の不幸の大もとじゃないかって。
マンデルス　奥さんまた間違ったことを。
アルヴィング夫人　でもそんな束縛にわたしもう我慢できない、我慢できないのよ！　自由になりたい、自由になりたい。
マンデルス　どういうこと。
アルヴィング夫人　アルヴィングの生活を隠しておくべきじゃなかった。でも勇気がなかったの――なんて臆病だったんだわたしは。
マンデルス　臆病？
アルヴィング夫人　人が知ったらこう言うと思った、「かわいそうな男、少しぐらい遊ぶのも無理はない、一度逃げ出した女房といっしょなんだから」
マンデルス　その点はまったく否定できないんじゃないですか。
アルヴィング夫人　もしわたしに勇気があったらオスヴァルにこう言うべきだった。いいかい、おまえのお父さんは堕落してた――。そしてあなたに話したことを全部あの子にも教えてやるべきだった――何もかも。

マンデルス　いったい――あなたって人はほんとにびっくりしてしまう。
アルヴィング夫人　分かってる分かってる！　自分でも驚いてしまう。わたしはなんて臆病なんだ。
マンデルス　当然の義務をはたすことが臆病ですか？　忘れてるんじゃありませんか、子どもは親を尊敬し愛すべきだということを。
アルヴィング夫人　一般論はやめましょう。問題は、オスヴァルがアルヴィング男爵を尊敬し愛すべきかどうかということ。
マンデルス　あなたには、母親として、息子の理想とするものを壊してはいけないという声が聞こえてこないんですか。
アルヴィング夫人　それじゃ真実はどうなる？
マンデルス　しかし理想はどうなる？
アルヴィング夫人　理想理想！　わたしがこんなに臆病でさえなかったら！
マンデルス　理想を非難するのはやめなさい奥さん――きっと仕返しがやってくる。オスヴァルの場合は特に。彼にはそうたくさんの理想があるわけじゃない。しかし父親は一つの理想になっている、それはわたしにも分かる。
アルヴィング夫人　おっしゃるとおり。
マンデルス　しかもその理想は、あなたが手紙で植え付けたもの。
アルヴィング夫人　ええ、義務と柔順さが第一だとわたし思い込んでたから。だからずっと青の子にうそをつきつづけた。なんてなんて臆病な！
マンデルス　おかげで息子さんは幸せな幻想に包まれてきた。――そんなに卑下すべきことじゃない。
アルヴィング夫人　ふん。今になってみればそれがいいことだったかどうか。――でもとにかくレギーネのことは、これ以上面倒なことにならないようにしなければ。
マンデルス　そんなことになったらそれこそ大ごとだ！
アルヴィング夫人　もしあオスヴァルの気持ちが真剣で、あの子の幸せになると分かっているなら――
マンデルス牧師　どうなんです？　もしそうだったら、どうするんです？

アルヴィング夫人　わたしがこんなにも骨の髄まで臆病な人間でなかったらオスヴァルにこう言ってやる。あの娘と結婚しなさい、ふたりでいいようにやりなさい。でもうそをつくことだけはしないでって。

マンデルス　奥さん！　正式に結婚させる！　そんなばかな――前代未聞だ――！

アルヴィング夫人　そうかしら。そういう結婚は全然ないと思ってるの？

マンデルス　何を言ってる、さっぱり分からない。

アルヴィング夫人　いいえ、あなた分かってる。

マンデルス　それは、家庭生活というものは、いつもいつも清らかだとはかぎらない。しかし、あなたが言ってるようなことは聞いたこともない――。それをあなたは、母親の身で、自分の息子にそんなことを！

アルヴィング夫人　でもできないのわたしには。

マンデルス　臆病だから。もし臆病でなければ――！　神様――なんというショッキングな――！

アルヴィング夫人　でももとをただせば、わたしたちみんなそういう交わりから出たんじゃない？　そういうことを生じさせたのは神様でしょ牧師さん。

マンデルス　そんなことを今議論する気はありません。あなたは正常な感覚を失くしている。そんなことを臆病だなんて――

アルヴィング夫人　わたしが言ってるのはこういうこと。わたしがこんなにびくびくしてるのは、この胸の中に住んでいるゆうれいみたいなものを、どうしても追い払えないからだってこと。

マンデルス　なんですそれは？

アルヴィング夫人　ゆうれいみたいなもの。あそこでレギーネとオスヴァルの声を聞いたとき、まるでゆうれいに出会った気がした。でも考えてみれば、わたしたちはみんなゆうれい。わたしたちの心のなかに現れてくるのは、父や母から受け継いだものだけじゃなくて、古い死んだ考えや信仰。この胸のなかにひそんでいて、どうしても追い出すことができない。新聞を読んでも、行と行の間にゆうれいがひそんでる。国じゅうにひしめきあってる。浜の砂ほどに夥しい

数。そしてわたしたちはみんな骨の髄まで光を恐れてる。
マンデルス　はっ！　ご立派な考えだ。
アルヴィング夫人　ええ。こういう考えを持ったのは、あなたのおかげ。その点は感謝してる。
マンデルス　わたしのおかげ？
アルヴィング夫人　ええ。あなたわたしに義務と柔順さを教え込んだ。わたしは反発してあなたの教えを自分の目で見直し始めたの。そして一つの結び目をほどいたら、全部ばらばらになってしまった。おかげでわたし、それが機械縫いだってことを知った。
マンデルス　あれはわたしの人生のうちで、いちばん苦しい戦いだった。その戦いに勝利を得た結果がこういうことだとは！
アルヴィング夫人　むしろ最大の敗北というべきじゃない。
マンデルス　いや最大の勝利だった。己自らに打ち勝った勝利だったんだヘレーネ。
アルヴィング夫人　あれはわたしたちふたりに対する罪だった。
マンデルス　君は狂乱状態でわたしのところにきて叫んだ、「わたしはあなたのもの、さあ、わたしを抱いて！」わしはこう答えた、「女よ、汝の正しき夫のもとへ戻れ。」それが罪なのかね。
アルヴィング夫人　ええ、わたしはそう思う。
マンデルス　われわれはもうお互いを理解できない。
アルヴィング夫人　今はそうなったのね。
マンデルス　断じて――断じて、心のすみずみまで捜しまわっても、わたしはあなたを他の男の妻として以外の目で見たことはなかった。
アルヴィング夫人　あら――そうだった？
マンデルス　ヘレーネ――
アルヴィング夫人　昔のことは簡単に忘れる。
マンデルス　わたしは違う。いまも昔も変わってはいない。
アルヴィング夫人　ええええええ――昔の話しはやめましょう。今あなたは委員会の仕事に精を出し、わたしはここでゆうれいと戦ってる。
マンデルス　そう、そっちの方なら、わたしもなんとか手立てがあるかもしれない。

アルヴィング夫人　あの娘にだれかいい相手を世話してやる――
マンデルス　そう、それがいちばんいい。レギーネはもう間違いなく適齢期だし。
アルヴィング夫人　早熟な娘。
マンデルス　そう、ずいぶんいい体をしてる。ま、とにかく、さしあたっては家に戻して父親の下で――いや、そうだ、エングストランは違うんだ――。あの男――よくもこんなことを隠しておけた、このわたしに！
アルヴィング夫人　だれだろう？　おはいり。

（3）

エングストラン　どうかごめんくださいまし。あのう――
マンデルス　ははあ――
アルヴィング夫人　エングストラン。
エングストラン　どなたもおりませんでしたものですから、失礼とは存じましたが、戸をたたかせていただきました。
アルヴィング夫人　何か用？
エングストラン　はいありがとうございます。あのう、牧師さまにちょっとお話が――
マンデルス　ふん、わたしにかね？
エングストラン　はい、できますれば――
マンデルス　いったいなんだ？
エングストラン　はい、そのう、つまり、牧師さま、今――下でお給金をいただきました、ありがとうございます奥さま――何もかも終わりました。それで、ちょっと考えましたんですが、いっしょに働いてまいりました仲間たちと、そのう、何をしたらいいんじゃないかと――その、今晩ちょっとお祈りの会をやって打ち上げにしたらどうかと思いまして。
マンデルス　お祈りの会？　孤児院で？
エングストラン　はい、でも、牧師さまがよくないとお考えでしたら

それはもう――
マンデルス　いや、いいと思うよ。しかしね――
エングストラン　わたしは自分でも毎晩あそこでちっちゃなお祈りの会をやっておりましたが――もちろん、なににも知らない馬鹿ものでして、ほんとに――それで、せっかく牧師のマンデルスさまがおいでなんですから――
マンデルス　その前に、一つ聞きたいことがある。君はそういう祈りの集まりにふさわしい正しい心の持ちかたをしているかね？　君の良心には少しも疚しいところはないかね？
エングストラン　とんでもありません牧師さま。良心なんて、そんなものとはかかわってはおりませんですよ。
マンデルス　いや、その良心が問題だ。さあなんと答える。
エングストラン　はい、良心でございますか――それは、痛むこともありますですねときどきは。
マンデルス　そう。それじゃ正直に言うんだ――レギーネとは本当はどういう関係だ？
アルヴィング夫人　牧師さん！
マンデルス　いやどうか――
エングストラン　レギーネ！　レギーネがまさか間違いを？
マンデルス　してないと願いたい。しかし聞いているのは、君とレギーネの関係だ。君はあの娘の父親ということになっている。うん？
エングストラン　はい――そのう――牧師さまはご存じじゃございませんか、あの、わたしとかわいそうなヨハンネのことは。
マンデルス　言い逃れはやめたまえ。君の死んだ奥さんはここをやめる前に、すべて奥さまに話しているんだ。
エングストラン　そんな――！　あれはお話ししましたですか、やっぱり。
マンデルス　だからみんな分かってる。あれ以来ずっと君は本当のことを隠してきた。わたしにだ、何ごとにつけ面倒を見てやったこのわたしにだよ。
エングストラン　いや申しわけございません。そのとおりでございます。
マンデルス　わたしはそんな扱いを受ける値打ちしかないのかねエン

グストラン？　どうだね。
エングストラン　牧師さまに助けていただかなかったらわたしはとうの昔にだめになっておりました。
マンデルス　だのに君はこういう報い方をする。教会の牧師帳にうその記入をさせ、そのあともずっと騙していた。君に弁解の余地はまったくない。だから今日かぎり、君との仲はお終いにする。
エングストラン　どうもいたしかたございませんようで。
マンデルス　そうだ。どうやっても君の行為は正当化できるとは思われない。
エングストラン　はい、ですが、牧師まに打ち明けておりましたら、あの女はいっそう辱めを受けることになりましたでしょう。牧師さま、われわれ男は、あわれな女をそんなに厳しく裁いていいものでしょうか。
マンデルス　わたしは何もあの女を裁いてはいない。わたしがうそつきだと言っているのは君のことだ。
エングストラン　牧師さまにちょっとおたずねしてもよろしゅうございますか？
マンデルス　なんだ、言いたまえ。
エングストラン　男が、堕落した女を救うのは正しい行いじゃございませんか？
マンデルス　当然。
エングストラン　それに、いったん約束したことはどこまでも守るのが男じゃございませんか？
マンデルス　もちろん、しかし――
エングストラン　あのときヨハンネが、あのイギリス人のおかげで――それともアメリカ人だったかロシア人だったか、まあ、そんなところでしょうが――不幸な身になりましたとき――あの女は町にやってまいりました。わたしは前に、一、二度あれに肘鉄を食らわされたことがありましてね。あれは生っ白い男にしか目がありませんでしたから。わたしはこんな曲がった足をしてますでしょ。ほら、覚えておられますか、わたしがなけなしの勇気をふるって、船乗りたちの、それ、酔っ払い宿になってるダンス・ホールに出かけて、やつらに「新しい人生に向かって歩み出せ」と説教しようとしまし

たとき――
アルヴィング夫人　ふん――
マンデルス　知っているよエングストラン。あのならずものがきみを外にほうり出した。その曲がった足は名誉のしるしだ。
エングストラン　なにも自慢してるんじゃありません。ですが申し上げたいのは、あの女がやってきて、涙をぽろぽろこぼして――ほんとに牧師さま、あれの話にはもらい泣きいたしました。
マンデルス　うん、それで？
エングストラン　はい、それでわたしは申しました。そのアメリカ人は世界の海をのりまわしてる。あんたはまあヨハンネ、とわたしは申しました、転落した堕落女だ。しかしな、ヤーコブ・エングストランは、とわたしは申しました、二本の足でしっかりと大地に立っている――その、たとえで申しましたんで――
マンデルス　つづけたまえ。
エングストラン　はい、それでわたしは、あの女を救うために結婚いたしました。そうやってあれが外国人とふしだらをやったことを人に知られないようにしたんでございます。
マンデルス　それは感心なことだ。ただ、腑に落ちないのは、君が金を受け取ったということ――
エングストラン　金？　わたしが？　全然これっぽっちも――。
マンデルス　しかし――？
エングストラン　ああ、はいはい――ちょっと待ってくださいまし。ああ思い出しました。ヨハンネはちっとは金を持っておりました、たしかに。ですが、そんなものは知りたくもない、とんでもない、とわたしは申しました、それは悪魔の金だ、罪の金だ、そんな汚い金貨は――それともお札でしたか――そんなものアメリカ人に投げ返してやれ、とわたしは申しました。ですが、そのときやつはもうとっくに荒海の向こうってわけで牧師さま。
マンデルス　そうだったのか君。
エングストラン　はい、それでわたしとヨハンネは、その金を子どもの養育費に使うことで同意いたしました。それでそのとおりになりました。それはきちんと計算してお目にかけられます。
マンデルス　こうなると話もずいぶん違ってくる。

エングストラン　これが一部始終で。これでもわたしはレギーネの本当の父親としてやってまいりました――そりゃあわたしの力なんか、たかが知れておりますが――弱い人間でございますからわたしは、情けないことに。
マンデルス　いやいやエングストラン――手を出してくれ、さあ。
エングストラン　とんでもございません牧師さま――
マンデルス　さ。そうら。
エングストラン　牧師さまには手をついておわび申します――
マンデルス　いや逆だよ。わびなくちゃならないのは、わたしの方だ――
エングストラン　とんでもありません――
マンデルス　いやそうだよ。心からわびをする。誤解していた。許してくれたまえ。何かわびのしるしに、わたしにできることがあればなんでも――
エングストラン　ほんとでございますか。
マンデルス　喜んで――
エングストラン　それならひとつちょうどいい具合に。わたしはここで働いていただきましたお給金で、町に一つ、船乗り宿のようなものを始めようと思っておるんでございます。
アルヴィング夫人　あんたが？
エングストラン　はい。まあいわば船乗りの孤児院みたいなものでして。世界を股にかける船乗りにはしばしば誘惑が多いものでございますから。うちの宿では、つまり親鳥の羽根のしたにいる、とまあ、そういったものに、はい。
マンデルス　どう思います奥さん！
エングストラン　実のところ、手初めにちと手持ちが足りないんでございますが、その、ちいとばかりお助けがあれば――
マンデルス　いいだろう、考えておこう。しかし今はもう下に行って準備をしておいてくれたまえ。火もともして。そうすれば少しは厳かになるだろう。それではお互い、しばしのありがたい一時を持つことにするかエングストラン。今は君もそれにふさわしい心を持っていると分かったから。
エングストラン　そう思います。それじゃごめんくださいまし奥さま。

いろいろありがとうございました。どうかレギーネのことをよろしくお願い申します。かわいそうなヨハンネの娘――だからってあの子はわたしの心に深く結びついております。いやそうですとも。

（4）

マンデルス　どうですか奥さんあの男のことは！　聞いてみると話は全然違ってましたね。

アルヴィング夫人　そうね。

マンデルス　人を判断するのはどんなに注意してもしすぎることはない。しかし間違いに気づくというのも、またなんという喜びでしょう。

アルヴィング夫人　ええ、あなたってほんとに大きな赤ちゃん。

マンデルス　わたしが？

アルヴィング夫人　あなたの首にこの腕をまきつけて抱きしめたいくらい。

マンデルス　いやいや、頼みますよ――

アルヴィング夫人　まあ、そんなに怖がらなくても。

マンデルス　あなたはときどきとんでもないやり方で、自分の感情を表に出す。さ、この書類をカバンにつめて。オスヴァルが戻ったらよく見張っておくように。あとでまたまいります。

（5）

アルヴィング夫人　オスヴァル、まだいたの！　散歩に出たんだとばかり思ってた。

オスヴァル　（内で）こんな天気に？　今でてったのは牧師さん？

アルヴィング夫人　そう。下の孤児院に行かれた。

オスヴァル　ふん。

アルヴィング夫人　ねえオスヴァル、そのリキュール強いのよ。気をつけなさい。

オスヴァル　こいつはじめじめするときにいいんだ。
アルヴィング夫人　それよりこっち来て座らない？
オスヴァル　そこじゃ煙草はだめでしょ。
アルヴィング夫人　シガーなら吸っていいのよ。
オスヴァル　うん。じゃちょいともうひと口――（出てくる）牧師さんは？
アルヴィング夫人　下の孤児院だって今言ったじゃない。
オスヴァル　ああそうか。
アルヴィング夫人　ずっと食堂にいたのオスヴァル。
オスヴァル　だって気持ちがいいんだ。久しぶりに家に戻って、おいしいご飯を食べる。
アルヴィング夫人　おまえ！
オスヴァル　だって他には何もない。何もできない――
アルヴィング夫人　何も？
オスヴァル　一日じゅう日もささない。雨ばかり。ああ仕事ができない、それなんだ。
アルヴィング夫人　おまえ、戻ってくるのがいいかどうかよく考えた方がよかったんじゃない。
オスヴァル　いや、どうしても戻らなくちゃならなかった。
アルヴィング夫人　だけどオスヴァル、お母さんはこうやっておまえといっしょにいる幸せを何百回でもあきらめるよ、もしおまえが――
オスヴァル　お母さん――ぼくが家にいるのそんなに幸せ？
アルヴィング夫人　幸せでなくって！
オスヴァル　ぼくなんかいてもいなくても変わりないんだと思ってた。
アルヴィング夫人　お母さんにそんなことを言うのオスヴァル？
オスヴァル　だって、ぼくがいなくても結構やってきただろ。
アルヴィング夫人　そう、それは本当。
オスヴァル　いっしょに座っていい？
アルヴィング夫人　ええお座り。
オスヴァル　お母さんに話がある。
アルヴィング夫人　何！
オスヴァル　ぼくはもう我慢ができない！

Fo

アルヴィング夫人　何が？　なんのこと？
オスヴァル　手紙には書けなかった。でも今は帰ってきたんだから――
アルヴィング夫人　オスヴァル、いったいなんなの？
オスヴァル　きのうもきょうもこの考えを追い払おうとしたんだけど――一所懸命に。でもだめなんだ。
アルヴィング夫人　ちゃんと話してちょうだいオスヴァル！
オスヴァル　座って。話してみる。――ぼく旅の疲れだって言ったけど――
アルヴィング夫人　ええ。
オスヴァル　体が弱ってるのはそのためだけじゃない。普通の疲れじゃない――
アルヴィング夫人　オスヴァル、まさか病気じゃないでしょ！
オスヴァル　座っててお母さん。落ち着いて。これは病気じゃない、普通に病気と呼んでるものじゃね。お母さん、ぼくは精神的にもうだめなんだ。――破滅なんだ――二度と仕事ができない！
アルヴィング夫人　オスヴァル！　こっちを見て！　そんなことうそよ！
オスヴァル　二度と仕事ができない！　絶対に絶対に！　生ける屍ってやつ！　お母さんこんな恐ろしいこと考えられる？
アルヴィング夫人　どういうことなのオスヴァル？
オスヴァル　どうしてだか分からない。ぼくは悪い遊びをしたことなんか一度もないほんとだよ。だのにやっぱりこんなになってしまった。みじめな。恐ろしい。
アルヴィング夫人　直るよそんなもの。過労よ。そうに決まってる。
オスヴァル　ぼくもはじめはそう思った。でも違うんだ。
アルヴィング夫人　全部話してちょうだい。
オスヴァル　うん。
アルヴィング夫人　はじめに気付いたのはいつ？
オスヴァル　このまえ帰国したあと、パリに戻ってからすぐ、ものすごい頭痛がし始めた――特に後頭部か。首から上に鋭い鉄棒が突き刺さったみたいだった。
アルヴィング夫人　それで？

オスヴァル　はじめは、若いころよくあった普通の頭痛だと思った。
アルヴィング夫人　ええええ――
オスヴァル　でも違う。すぐに気がついた。仕事ができない。新しい大きな絵を始めようと思ったんだけど、まるで力が出ない。まひしてしまったみたい。描こうとしても集中できない。ふらふらして――目がまわる。たまらない感じなんだ！　それでとうとう医者に診てもらった――そしたら医者が言うには――
アルヴィング夫人　なんて？
オスヴァル　パリの一流の医者だ。ぼくが自分の症状を話すと、全然関係ないことを次々と聞いてきた。何を考えているのか、さっぱりわからなかった――
アルヴィング夫人　それで！
オスヴァル　それで最後に医者はこう言った。ぼくは生まれたとき、すでに虫食い状態だったって――「ヴェルムゥリュ」フランス語でそう言う。
アルヴィング夫人　どういうことなの？
オスヴァル　ぼくも分からなかったから、分かるように話してくれと言った。そしたらあの皮肉屋、こう言う。ああ――！
アルヴィング夫人　なんておっしゃったの？
オスヴァル　父親の罪が子に報いた。
アルヴィング夫人　父親の罪――！
オスヴァル　もう少しでやつをぶん殴るところだった――
アルヴィング夫人　父親の罪――
オスヴァル　ばかげてる。もちろんそんなこと絶対にあり得ないと言ってやった。でも医者はあくまで言い張る。それでお母さんの手紙を見せて、お父さんのことが書いてある部分を訳して聞かせたらやっと――
アルヴィング夫人　やっと何――？
オスヴァル　間違いを認めた。それでぼくは真相を知った。信じられない。若いころ仲間といっしょに過ごした生活、楽しかった幸せな生活、あれがいけなかった。ぼくには強烈すぎた、つまり自業自得ってわけだ！
アルヴィング夫人　いいえオスヴァル！　そんなことない！

オスヴァル　ほかには説明のしようがない。医者がそう言った。たまらない、自分で自分の一生をめちゃめちゃにしてしまった。あさはかだった。ああ、もう一度やり直せるんだったら――何もかも一から出直すことができるんだったら！　これがまだ、遺伝だとか――何か自分ではどうしようもなかったことなら。でもこんなことって！　馬鹿ものだ。自分の幸せを簡単にすててしまった。――自分の人生を！

アルヴィング夫人　いえいえそんなことない！　自分に絶望してはいけない。

オスヴァル　お母さんは知らないんだよ――。とてもつらい思いをする！　ぼくのこと、たいして思ってなければいいと何度願ったかしれない。

アルヴィング夫人　たったひとりの息子よ！　心にかけているものはほかに何もないのよ！

オスヴァル　うん分かってる。だからつらい――もうやめよう。こんなこと長くは考えてられない。何か飲み物をくれないかなお母さん！

アルヴィング夫人　飲みもの？　何がほしいの？

オスヴァル　なんだっていい。冷たいパンチでも。

アルヴィング夫人　でもオスヴァル――

オスヴァル　優しくしてお母さん。何か飲んでないとやりきれない。こんなに暗くて！

アルヴィング夫人　（呼び鈴をならす）

オスヴァル　いつまでも雨はやまない、くる日もくる日も、何週間も何か月も日のさすことがない。家に帰るといつだってそうだ。日がさすのを見たことがない。

アルヴィング夫人　オスヴァル――また発とうと思ってるね！

オスヴァル　ふん――何も考えない。考えることができない！　考えることをやめてるんだ。

レギーネ　お呼びですか奥さま。

アルヴィング夫人　ええ、シャンペンの小びんを持ってきてくれない？

レギーネ　かしこまりました。（去る）

オスヴァル　そうこなくちゃ。お母さんが息子の喉の渇きを放っておくなんて、そんなことはしない分かってた。
アルヴィング夫人　かわいそうに。おまえがほしいというものをだめだなんていうと思うお母さんが？
オスヴァル　本当お母さん？　それ、本心から言ってるの？
アルヴィング夫人　何が？
オスヴァル　ぼくのほしいものをだめだとは言わないってこと。
アルヴィング夫人　でもオスヴァル――
オスヴァル　（レギーネ来る）しっ！
レギーネ　栓を抜きましょうか――
オスヴァル　いやありがとう、ぼくがやる。（レギーネ去る）
アルヴィング夫人　おまえ何を言いたかったの――お母さんがだめだと言わないものって？
オスヴァル　まず一杯、それとも二杯。
アルヴィング夫人　ありがとう――お母さんはいい。
オスヴァル　そう、じゃぼくにだ！
アルヴィング夫人　それで？
オスヴァル　お母さんと牧師さん、お昼を食べてる間、妙に静かだった気がするけど――
アルヴィング夫人　そう？
オスヴァル　――ねえ、レギーネのことどう思う？
アルヴィング夫人　お母さんが？
オスヴァル　彼女ってきれいじゃない？
アルヴィング夫人　オスヴァル、おまえはあの娘（こ）のことがよくわかってないのよ――
オスヴァル　だから？
アルヴィング夫人　残念だけどレギーネは自分の家に長くい過ぎた。もっと早くここに連れてくるべきだった。
オスヴァル　でも彼女って見ててきれいじゃないお母さん？
アルヴィング夫人　あの子には欠点がたくさんある――
オスヴァル　そんなものなんだって言うんだ。

アルヴィング夫人　それでもお母さんはあの娘が好き。あの娘には責任もある。どんなことがあっても不幸な目に合わせることはできない。それだけは黙って見ていられない。

オスヴァル　お母さん、レギーネはぼくの唯一の救いなんだ。

アルヴィング夫人　どういうことそれは？

オスヴァル　こんなところで、一人で苦しんでるのはぼくには耐えられない。

アルヴィング夫人　お母さんがいるじゃない。

オスヴァル　分かってる。だから帰ってきた。でもだめなんだ、だめなんだよ。とても我慢できない！

アルヴィング夫人　オスヴァル！

オスヴァル　ぼくは別の生活が必要だ。お母さんとは別れなくちゃならない。お母さんに見ててほしくない。

アルヴィング夫人　かわいそうに！　でもおまえが病気のときは――

オスヴァル　病気だけならお母さんといっしょにいるよ。なんといってもいちばん近いんだから。でも、このきりきりする苦しさ――死ぬほどの不安――たまらない！

アルヴィング夫人　不安て、なんの不安？

オスヴァル　もうきかないで。ぼくにも分からない、話せない。（夫人は呼び鈴をならす）どうするの？

アルヴィング夫人　楽しくなってもらいたい。くよくよしてちゃだめ。（現れたレギーネに）もっとシャンペンを、大きい壜。（レギーネ去る）

オスヴァル　お母さん！

アルヴィング夫人　田舎だからって楽しみ方くらい知ってるんだよ。

オスヴァル　彼女、見ててきれいじゃない？　あの体つき！　健康そのもの、ピチピチしている。

アルヴィング夫人　お座りなさいオスヴァル。落ち着いて話をしよう。

オスヴァル　お母さん知らないだろうけど、ぼく彼女に悪いことをしちゃった。償いをしなくちゃならない。

アルヴィング夫人　おまえ！

オスヴァル　それとも、まあちょっと考えが足りなかったというか―

―いずれにせよ悪気はなかったんだ。ぼくこのまえに帰ってきたときにね――

アルヴィング夫人　ええ。

オスヴァル　彼女パリのことをいろいろ聞くものだから、いろんなことを話してやった。それである日、おまえもパリに行きたいかって聞いたんだ、思い返してみると、

アルヴィング夫人　それで？

オスヴァル　彼女顔を赤くして、もちろん行きたいって言った。そうか、とぼくは言った。じゃなんとかやってみようか、とかなんとか。

アルヴィング夫人　それから？

オスヴァル　ぼくはそんなことみんな忘れてた。ところが、おととい家に帰ってきたとき、これからずっとここにいることにしたけど、嬉しいかって聞いたら――

アルヴィング夫人　ええ。

オスヴァル　彼女けげんな顔して、でもわたしのパリ行きはどうなりますって――

アルヴィング夫人　パリ行き！

オスヴァル　ぼくが言ったことを本気にしてた。ずっとぼくのことを思ってた、フランス語まで勉強して――

アルヴィング夫人　それで――

オスヴァル　お母さん――ぼくはあの素晴しく健康な娘を目の前にして――前は全然気がつかなかったのに――今彼女が両腕を広げてぼくを受け入れてくれるのを見て――

アルヴィング夫人　オスヴァル――

オスヴァル　ぼくにはひらめいた。彼女こそ救いの天使だ。彼女には生きる喜びがあるそれに気がついた。

アルヴィング夫人　生きる喜び――？　それが救いなの？

レギーネ　（入ってくる）遅くなって申しわけありません。貯蔵室までとりに行ったものですから――

オスヴァル　グラスをもう一つ持ってきて。

レギーネ　奥さまのはそこにそこにありますけど。

オスヴァル　うん、でもおまえのグラスだ。どうしたレギーネ？

レギーネ　それは奥さまのご意向ですか――？

アルヴィング夫人　持っておいでレギーネ。（レギーネ去る）
オスヴァル　あの歩き方――堂々としてる臆するところがない。
アルヴィング夫人　こんなこといけないよオスヴァル！
オスヴァル　もう決めた。反対したってダメ――
レギーネ　（入ってくる）
オスヴァル　座れよレギーネ。
アルヴィング夫人　かけなさい。オスヴァル――おまえ生きる喜びのことを言ったけど、あれはどういうこと？
オスヴァル　生きる喜び、それなんだよお母さん――ここには生きる喜びが少なすぎる。ここでそれをかんじたことがない。
アルヴィング夫人　お母さんがいるのに？
オスヴァル　お母さんにはわからない。
アルヴィング夫人　いいえ分かる今は。
オスヴァル　生きる喜び――それから働く喜び。そうなんだ同じことなんだ。でも、この国の人には分からない。ここじゃ労働は何か呪われた罰だと思ってる。人生は、そこから抜け出すのが早ければ早いほどいいと教えている。でも外じゃだれもそんなこと信じてはいない。外の世界じゃ生きているだけで大変な祝福だと考えている。知ってる？　ぼくの絵はみんな生きる喜びを描いた。ただそれだけを。生きる喜び。浮き浮きして――満足そうに輝いた顔。ぼくはこの家にいるのが怖い。
アルヴィング夫人　怖い？　何が怖いの？
オスヴァル　ここでぼくの中のすべてが醜いものに変わってしまうんじゃないか。
アルヴィング夫人　そう思う？
オスヴァル　うん。ここでは同じ生活が同じにならない。
アルヴィング夫人　やっと今わたしにも分かった。
オスヴァル　何が？
アルヴィング夫人　初めて分かった。今は話ができる。
オスヴァル　なんのこと――
レギーネ　わたくしはいない方が？
アルヴィング夫人　いいえいてちょうだい。今は話せる。みんな話してあげる。それから選べばいい。オスヴァル、レギーネ！

（6）

マンデルス　いやあ、下ではほんとにいい時をすごしました。エングストランの船乗り宿のことは助けてやらなければ。レギーネはあの男を助けて――

レギーネ　いいえ結構です牧師さま。

マンデルス　なんだ――？　こんなところに――グラスをもって！

レギーネ　パルドン――！

オスヴァル　レギーネはぼくといっしょに行くんだ。

マンデルス　いっしょに！

オスヴァル　ええ、ぼくの妻として。

マンデルス　しかし君、それは――！

レギーネ　わたくしのせいじゃありません。

オスヴァル　それとも、ぼくがここにいることになれば彼女もここにいる。

レギーネ　ここに！

マンデルス　あなたって人は奥さん、開いた口がふさがらない。

アルヴィング夫人　大丈夫、そんなことにはならない。だって今はわたし話をするから。

マンデルス　とんでもない！　いけないいけませんよ。

アルヴィング夫人　いいえ話せる。話したいの。だからって理想を壊すことにはなりません。

オスヴァル　何か隠してることがあるのお母さん。

レギーネ　奥さま！　なんでしょう――！　人が叫んでます。

オスヴァル　何が起きたんだ？　あの明かりは何だろう？

レギーネ　孤児院が火事です！

アルヴィング夫人　火事！

マンデルス　ばかな！　今あそこにいたばかりだ。

オスヴァル　ああ――お父さんの孤児院――！（走り去る）

アルヴィング夫人　ショールをとってレギーネ！　真っ赤に燃えてる。

マンデルス　恐ろしい！　奥さんあの炎はこの家にくだされた天罰で

火が消え終わったらco

す！

アルヴィング夫人　ええええそうでしょう。おいでレギーネ。（去る）

マンデルス牧師　しかも、保険なし。

第三幕

（1）

マンデルス　（入ってくる）こんあ恐ろしい夜は初めてだ。
レギーネ　ほんとに牧師さま、ひどい災難。
マンデルス　やめてくれ！　考えるのもいやだ。
レギーネ　いったいどうしてこんなことに――？
マンデルス　わたしにどうして分かる？　聞かないでくれ！　あんたの親父さんだけでたくさんだ――
レギーネ　あの人が何か？
マンデルス　あいつのおかげで頭がくらくらする。

（2）

エングストラン　牧師さま――！
マンデルス　おまえ、ついて来たのか！
エングストラン　はい、それはもう、どうしたって――！ほんとにひどいことになりました牧師さま！
マンデルス　まったくまったく！
レギーネ　どうしたの、いったい？
エングストラン　あのお祈りの集まりから出たんだよ。（低く）もうこっちのもの！（高く）これがみんなマンデルス牧師さまのせいだとは、いやいや悪いのはおれなんだ。。
マンデルス　しかし、わたしはたしかなんだがねエングストラン――
エングストラン　でも、あそこでローソクを手にしたておられたのは牧師さまただおひとりでございました。
マンデルス　きみはそう言う。しかしね、正直言ってわたしは覚えがないんだがね。

エングストラン　わたしはちゃんと見ておりました。牧師さまはローソクを指でもみ消しなさると、その先をぽいとおが屑のなかへおすてなさった。
マンデルス　それを見たのかね？
エングストラン　はい、この目ではっきりと。
マンデルス　どうも分からない。ローソクを指でもみ消すなんて、そんなこと今までやったことがない。
エングストラン　はい、なんてまた不用心なと思いましたほんとにまあ。ですがこれがそんなにお困りですか牧師さま？
マンデルス　ああ言わないでくれ！
エングストラン　それに牧師さまは、建物に保険もかけなかったとか。
マンデルス　そうそうそう。
エングストラン　保険なし。それでいっさいがっさい灰。ほんにほんになんという災難！
マンデルス　まったくだよエングストラン。
エングストラン　町にも村にもありがたい建物だと噂しておりましたのに――新聞は黙ってはおりませんでしょう。
マンデルス　それなんだいちばんつらいのは。非難、罵倒――考えただけでぞっとする！

（3）

マンデルス　ああ、戻ってらした――
アルヴィング夫人　これであなた、お祝いの演説がなくなったわね。
マンデルス　演説くらいならいくらでも――
アルヴィング夫人　これがいちばんよかったのよ。あの孤児院はもともと人の役に立つものじゃなかった。
マンデルス　しかし、たいへんな災難ですよ。
アルヴィング夫人　後始末は簡潔に、感情抜きで話しましょう――エングストラン、牧師さんを待ってるの？
エングストラン　はい、さようで。
アルヴィング夫人　フェリーでお帰り？

マンデルス　ええ、一時間後に出ます。
アルヴィング夫人　書類は全部持ってってお願い。わたしはもう一言も聞きたくない。ほかのこともあるし。あなたが全部処理できるようにあとで全権委任の証明書を送ります。
マンデルス　それは喜んで――。登記上の決定はすべて書き直しが必要でしょう。今考えてるのは、ソールヴィク地区は村の所有にする。土地は価値がないわけなじゃいから何かの役には立ちます。それから、銀行預金の利子は何か有益な事業の援助に使ってはどうかと思ってます。
アルヴィング夫人　どうぞ。わたしはどうなっても同じ。
エングストラン　あの、船乗り宿のこともどうか――牧師さま。
マンデルス　ああ、何か言ってたな。あとで考えよう。
エングストラン　あとでなんてくそくらえ――
マンデルス　しかしわたしはいつまでこの管理をしていられるか。世間はわたしに身を引けと言うかもしれない。火事の原因検証の結果によっては。
アルヴィング夫人　なんです？
マンデルス　結果がどう出るか、まったく予想がつかない。
エングストラン　そんなことはありません。ここにヤーコブ・エングストランがいるじゃありませんか。
マンデルス　しかし――？
エングストラン　ヤーコブ・エングストランは牧師さまがお困りのときに、知らん顔をしているような男じゃありません。
マンデルス　しかしいったい、どうやって――？
エングストラン　ヤーコブ・エングストランは、その、救いの天使ってやつですよ牧師さま！
マンデルス　いやいやそんなこと、うんと言うわけには。
エングストラン　いいですよ。前にも一度他人の罪を引き受けた男を知ってますでしょう。
マンデルス　いやあヤーコブ！おまえさん、ほんとに希なお人だ。いやいや船乗りの孤児院はちゃんと助けてあげる、安心したまえ。さあ、それじゃ出発だ。いっしょに行こう。
エングストラン　一緒にこ来いよ！　お姫さまみてえな暮らしができ

る。
レギーネ　メルシイ！
マンデルス　お元気で奥さん！　この家にもやがて秩序と道徳が支配しますように。
アルヴィング夫人　さようならマンデルス！
エングストラン　達者でなレギーネ。何かあったら、ヤーコブ・エングストランのいる場所は分かるだろ。小湊通り。ふん――世界を股にかける船乗りたちの宿は、「アルヴィング男爵の家」と名づけさせていただきます。その家は、わたしの思いどおり、男爵さまのお名に恥じないものにしてお目にかけます。
マンデルス　さあ行こうエングストラン。さようならさようなら！

（4）

オスヴァル　全部燃えてしまった。お父さんの記念は何ひとつ残らない。ぼくの体もここで燃え尽きてしまう。
アルヴィング夫人　オスヴァル！　あんなに長くいてはいけなかったよかわいそうに。顔をふいてあげる。びしょ濡れ。
オスヴァル　ありがとう。
アルヴィング夫人　疲れてない？　少しやすんだら？
オスヴァル　いやいや眠らない！　絶対に眠らないん。眠る振りをするだけ。今にやってくる。
アルヴィング夫人　そう、おまえやっぱり病気よ。
レギーネ　お坊っちゃまがご病気？
アルヴィング夫人　さあいっしょに座ろう――
オスヴァル　ええ。レギーネもここにいて。いつまえもそばについていてほしい。ぼくを助けてくれるねレギーネ。
レギーネ　なんのことかわたし――
アルヴィング夫人　助ける？
オスヴァル　うん、そのときになったら。
アルヴィング夫人　オスヴァル、お母さんがいるじゃない。お母さんが助けてあげるよ。

オスヴァル　お母さんが？　いや、お母さんにはできないよ。はっはっ！　お母さんはもちろんいちばんの身内だけど。ぼくをオスヴァルと呼んでくれレギーネ、オスヴァルと！
レギーネ　奥さまがお望みとは思いません。
アルヴィング夫人　もう少ししたらそう呼んでもよくなる。そこにお座り。さあ、かわいそうな坊や。おまえを苦しめている重荷を取ってあげる――
オスヴァル　お母さんにできる？
アルヴィング夫人　ええ、今はできる。さっき生きる喜びのことを言ってたでしょ。そのときお母さんにはこれまでの人生が新しい光の中ではっきり見えてきた。
オスヴァル　どういうこと？
アルヴィング夫人　若い中尉さんだったころのお父さん、お父さんには生きる喜びがあった！
オスヴァル　うん、知ってる。
アルヴィング夫人　あの人をみているだけで浮き浮きした。精力と活力がみなぎっていた！
オスヴァル　それで――？
アルヴィング夫人　生きる喜びそものといった赤ん坊。あの頃のあの人はほんとに赤ん坊だった。――それなのにこの田舎に引きこもって、なんの喜びもないこの田舎に。自己満足の生活。人生の使命なんて何もない。熱中する仕事なんてどこにもない。生きる喜びを持った友だちなんかひとりもいない。
オスヴァル　お母さん――！
アルヴィング夫人　だから、当然そうなるようになった。
オスヴァル　どうなった？
アルヴィング夫人　お父さんは自分の生きる喜びをどこに向かって吐き出せばいいか分からなかったのよ。お母さんも、みんなして植えつけた義務とかなんとかいうものに縛られていた。それを信じていた。何ごとも義務、義務――わたしの義務、あの人の義務。お母さんこの家を、お父さんに我慢できないものにしたんじゃないかと思う。
オスヴァル　そんなこと手紙にはちっとも書いてなかった。

アルヴィング夫人　おまえに話していいとは今まで思ってもみなかったの。でもお父さんはね、おまえが生まれるずっと前から身を持ち崩していた。それからレギーネは、この家の娘――わたしの息子と同じ権利を持っている。
オスヴァル　レギーネが――！
レギーネ　わたしが――！
アルヴィング夫人　そう。これで分かったわね。
オスヴァル　レギーネ！
レギーネ　じゃ、わたしのお母さんはそういう女だった。
アルヴィング夫人　おまえの母さんはいいところをたくさん持っていた。
レギーネ　ええ、でもやっぱりそういう女。わたしもときどきそんな風に思わないでもなかった。でも――。ええ奥さま、わたし今すぐここを出てもよろしいですか。
アルヴィング夫人　本気なの。
レギーネ　ええ。
アルヴィング夫人　もちろん好きにしていい、でもね――
オスヴァル　すぐに出るって？　おまえはこの家のものなんだよ。
レギーネ　メルシィお坊っちゃま――ふん、オスヴァルね。だけどこんなこと思いもしなかった。
アルヴィング夫人　レギーネ、わたし正直ではなかったけれど――
レギーネ　ええ残念！　オスヴァルが病気だと分かってたら――。まあ、どうせふたりはどうにもならない。ええ、わたしはこんな田舎で病人の世話をする気なんか全然ない。自分を大切にしなきゃ。気がついたときにはひとりぼっちってことになりかねない。わたしだってこの体には生きる喜びがあります奥さま！
アルヴィング夫人　情けないことに。でも我が身をすてることだけはしないでねレギーネ。
レギーネ　そうなればなったまでのこと。オスヴァルは父親に似て、わたしは母親に似る。そんなところでしょう。一つおたずねしていいですか？　牧師さんはこのことご存じですか。
アルヴィング夫人　何もかも。
レギーネ　急いで行けばフェリーにまだ間に合う。牧師さんはあてに

できる方。それにわたしだってちっとは分け前をもらってもいいでしょう――あのいやらしい大工と同じくらいには。
アルヴィング夫人　当然よレギーネ。
レギーネ　奥さまはわたしをちゃんとした娘に育てることもできたんです。だってその方がわたしには似合ってたでしょうに。でもおんなじこと！　今にきっと立派な男性ととシャンペンを飲むようになってみせる。
アルヴィング夫人　住むところが必要なときは帰っておいでレギーネ。
レギーネ　結構です。牧師さんに世話していただきます。それがだめなら、どこに行けばいいか分かってます。
アルヴィング夫人　どこ？
レギーネ　アルヴィング男爵の家。
アルヴィング夫人　レギーネ――おまえ、身を持ち崩してしまう！
レギーネ　くそくらえよ！　アデュー。

（5）

オスヴァル　行ってしまった？
アルヴィング夫人　ええ。
オスヴァル　これはどこか狂ってる。そう思う。
アルヴィング夫人　おまえショックだった？
オスヴァル　お父さんのこと？
アルヴィング夫人　ええ。ショックが強すぎた？
オスヴァル　どうして？　それは驚いたけど、でもぼくにはどうでもいいことだ。
アルヴィング夫人　どうでもいい！　お父さんが不幸だったってことが！
オスヴァル　そりゃ気の毒には思うよ、でも――
アルヴィング夫人　それだけ！　父親に対してそれだけ！
オスヴァル　父親父親っていうけど、お父さんのことなんか何も覚えちゃいない。覚えてるのは、一度反吐を吐かれたことだけ。
アルヴィング夫人　なんてことを。お父さんになんの気持ちもないの、

愛していないの！
オスヴァル　全然知りもしないのに？　親を愛する、そんなの迷信だ。
目覚めた女のくせにそんな迷信を信じてるの？
アルヴィング夫人　迷信――！
オスヴァル　分かってるだろう。偏見だよそんなもの。
アルヴィング夫人　ゆうれい！
オスヴァル　ゆうれいと言ってもいい。
アルヴィング夫人　オスヴァル――じゃおまえ、お母さんも愛していないの！
オスヴァル　お母さんのことは、ともかく知ってる――
アルヴィング夫人　でもそれだけ！
オスヴァル　お母さんがぼくを愛してくれていることも知ってる。感謝してる。それに今ぼくは病気だから、お母さんは役に立つ人だ。
アルヴィング夫人　そうよオスヴァル！　おまえの病気にお礼を言いたいくらい。病気のおかげでおまえは帰ってきてくれた。
オスヴァル　えええええ、ただの言葉。ぼくは病人なんだ、忘れないでお母さん。ぼくは他人のことにいちいち気を配ってはいられない。自分のことだけで精一杯。
アルヴィング夫人　お母さん我慢強くなる。
オスヴァル　それから陽気にも！
アルヴィング夫人　そう、そのとおりね。――おまえの心の重荷は取り除いてあげたかしら。
オスヴァル　ええ。でもこの不安はだれが除いてくれる？
アルヴィング夫人　不安？
オスヴァル　レギーネなら頼めばやってくれた。
アルヴィング夫人　なんのこと？　不安て何――レギーネならやるって？
オスヴァル　まだ夜中、お母さん？
アルヴィング夫人　もう明け方近い。山から日がさし始めてる。いいお天気になりそう！
オスヴァル　楽しみだ。喜びや生きがいを感じさせてくれるものがまだある――
アルヴィング夫人　そうよ。

オスヴァル　仕事ができなくても――
アルヴィング夫人　今にまたできるようになる。
オスヴァル　うん、ばかばかしい妄想。感謝する。もう一つだけ片をつけたら――話をしようお母さん。
アルヴィング夫人　ええ。
オスヴァル　やがて太陽が昇る。そうすれば分かる。ぼくのこの不安も消える。
アルヴィング夫人　何が分かるの？
オスヴァル　お母さん、ゆうべぼくが頼んだらなんでも聞いてくれるって言ったよね？
アルヴィング夫人　ええ。
オスヴァル　それ本当？
アルヴィング夫人　本当よ、大事な大事なったひとりの坊や。お母さんはおまえだけが生きがい。
オスヴァル　えええ。じゃ聞いて――。ぼくの話を静かに聞いて。
アルヴィング夫人　なんなの、何か恐ろしいこと？
オスヴァル　叫ばないで、いい？　約束する？　静かに座ってるんだよ。約束するお母さん？
アルヴィング夫人　えええ。さ、話してちょうだい。
オスヴァル　じゃ。この疲れね――それから仕事のこと考えられないってこと――これそのものが病気というわけじゃない。
アルヴィング夫人　じゃ何が病気なの？
オスヴァル　ぼくの病気は、それはね――（頭を指して）ここにある。
アルヴィング夫人　オスヴァル！　いえいえ！
オスヴァル　叫ばないで！　叫び声には我慢できない。そうなんだよ。それはここにある。虫食い始めてる。いつなんどき破裂するか分からない。
アルヴィング夫人　ああ――！
オスヴァル　静かにして！　これがぼくの状態――
アルヴィング夫人　うそよオスヴァル！　そんなはずない。そんなことあるはずがない！
オスヴァル　パリで発作がき。すぐに終わったけど、それで自分の様子が分かった。このたまらない心をきりきり刻むような不安はそれ

以来だ。だから急いでお母さんのところに帰ってきた――
アルヴィング夫人　帰ったのはそのため――！
オスヴァル　えなんともたまらない、どうすることもできない。これが普通の病気なら。死ぬのは恐くない。そりゃあ長生きはしたいけど。
アルヴィング夫人　ええええ。
オスヴァル　でもこれは。たまらない、いやだ。赤ん坊みたいになるなんて。自分では食べることもできない。それに――ああ――口にするのもたまらない！
アルヴィング夫人　赤ん坊の世話はお母さんがしてあげる。
オスヴァル　いやだ絶対にいやだ。それなんだいやなのは！　そんな状態で寝たまま。何年も。考えただけでぞっとする――そうやって年をとって、お母さんがいなくなってぼくひとり残される。これはすぐに死ぬ病気じゃないと医者は言ってた。一種の脳の軟化。いつでも浮かんでくるのは、野いちごの赤い色に似たヴェルヴェットのカーテン――触ると、とてもすべすべして――。
アルヴィング夫人　オスヴァル！
オスヴァル　お母さんはぼくからレギーネをとってしまった！　レギーネならぼくを救ってくれた。
アルヴィング夫人　どういうことそれは？　お母さんに救えないことがある？
オスヴァル　パリで発作が起きたとき医者は言った。今度起きたら――確実に起きるんだけど――もう望みはないって。
アルヴィング夫人　そんなことを医者が言うなんて――
オスヴァル　無理に言わせた。言わなきゃ覚悟がある脅してね――それでこれも手に入れた。何か分かる？
アルヴィング夫人　なんなの？
オスヴァル　モルヒネ。
アルヴィング夫人　オスヴァル――おまえ？
オスヴァル　全部で十二ある――
アルヴィング夫人　お母さんにちょうだいオスヴァル！
オスヴァル　まだだお母さん。
アルヴィング夫人　こんなこと我慢できない！

ラスト

オスヴァル　我慢しなくちゃ。レギーネに頼めばきっとやってくれた。
アルヴィング夫人　絶対にしない。
オスヴァル　発作が起きて、赤ん坊のように何もできず、ばあばあ言うだけで、寝ているほかないぼくを見たら――
アルヴィング夫人　絶対にレギーネはしない！
オスヴァル　レギーネならやるね。素晴らしい精力にあふれてるから、ぼくみたいな病人の看護はすぐに飽きてしまう。
アルヴィング夫人　じゃレギーネがいなくてほんとによかった！
オスヴァル　うん、だから今はお母さんがやってくれなくちゃ。
アルヴィング夫人　わたしが！
オスヴァル　ほかにだれがいる？
アルヴィング夫人　わたしが！　おまえの母親よ！
オスヴァル　だからこそだよ。
アルヴィング夫人　お母さんはおまえに命をあげたのよ！
オスヴァル　そんなものほしいと頼みはしなかった。それにいったいお母さんがくれた命ってどんな命なんだ？　こんなものいらない！お返しする！
アルヴィング夫人　助けて助けて！（走り去る）
オスヴァル　おいてかないで！　どこに行くの？
アルヴィング夫人　お医者さまをお呼びしてくる！
オスヴァル　（連れ戻す）行っちゃいけない。だれも来させちゃいけない。
アルヴィング夫人　オスヴァルオスヴァル――
オスヴァル　お母さんぼくの母親だろう――ぼくがこんなに苦しんでるのに！
アルヴィング夫人　さあ、お母さんの手よ。
オスヴァル　やってくれる――？
アルヴィング夫人　そのときになったらね。でも決してそうはならない。いいえそんなこと絶対にない！
オスヴァル　うん、そう願っておこう。できるだけ長くふたりいっしょに。ありがとうお母さん。
（間）
アルヴィング夫人　落ち着いた？　恐ろしかったのねオスヴァル。で

もそんなものみんな、ありもしない想像よ。苦しかったのね。今は休める。お母さんといっしょだもの大事な大事な坊や。ほしいものはなんだってあげる。小さかったときのように――そうらもう発作は終わった、簡単に過ぎてしまった！　お母さんには分かってた――。今日は気持ちのいい日、お日様が照ってきた。ふるさとをじっくり見ることができるよ。

（間）

オスヴァル　お母さん、お日さまをくれない？
アルヴィング夫人　なんて言った？
オスヴァル　お日さまがほしい、お日さま。
アルヴィング夫人　オスヴァル、どうしたの？
オスヴァル　（空をみつめている）お日さま――お日さま。
アルヴィング夫人　ああ！　こんなこと！　我慢できない！　あれはどこ？　だめだめだめ――でも！
オスヴァル　お日さまがほしい――お日さまがほしい。